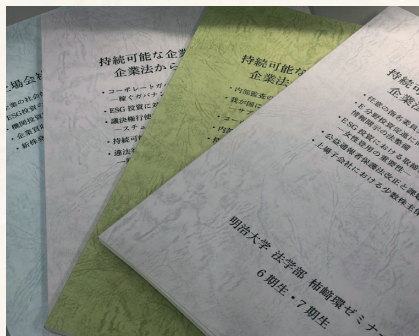




ゼミ活動の研究成果を公表

社が頭を悩ませている実践的課題に、柔軟な若い発想力で立ち向かっている。ゼミでの研究成果は、3年生が研究論文として班ごとにまとめ、公益財団法人石井記念証券研究振興財団が設ける「証券研究学生団体助成」へ応募しており、5年連続で高い評価を得て奨学金を頂いている。また、年に一回は、上場企業の現役取締役や元社長などをゼミにお招きして、各社のコーポレートガバナンスの取り組み状況を講演していただき、その後は、直接、ゼミ生とのざっくば

らんな質疑応答の時間を設けている。ゼミ生たちは、実際に取り組んでいる研究テーマについて、実務の最前線で活躍する経営トップから本音や実情を聞くことで、自分たちの研究に欠けている視点や、それでも大学での勉強が社会課題の解決に本当につながっているのだという手応えを感じるようだ。また、実社会に船出する直前の学生たちに向けて、学生時代にこれだけはやっておいてほしいことを経営トップから伺うことで、残り少ない学生生活に、改めて真剣に向き合う契機となっているようにみえる。大学教師の日々の小言よりも、よほど効き目があるようだ。

社外取締役の活動

現在、私は、上場企業4社で社外取締役や社外監査役として各社の取締役会に参加している。ここ数年、特に上場会社の取締役会での議論の在り方は、様変わりしたと言ってよい。上場規則の一部で

実践的な課題解決に向けて思いがけない示唆を与えてくれることもある。今後は、ゼミの研究活動と社外取締役の活動を有機的につなげることで、持続可能な企業社会の実現に少しでも貢献したいと考えている。



研究成果を携えた集合写真

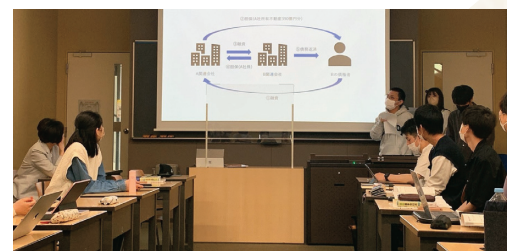
柿崎ゼミの学生は、春学期と秋学期に分けて2種類の研究課題に取り組んでいる。春学期は、他の一般的な法学部のゼミとそれほど

ゼミ活動

変わりはなく、いくつかの班に分かれて会社法を中心とした判例研究を行い発表する。座学で学んだ会社法の基礎を踏まえ、さらに判例や学説の理解を深めるため、ゼミの場で侃侃諤諤、討論する。ここでは、法学部生として法解釈学を踏まえた議論の進め方、ディスカッションの技を習得し、3年次の春か



ゼミ活動風景



ゼミでの研究報告

一方、春学期で鍛えた法解釈学の力をもとに、秋学期には、いよいよ持続可能な企業社会の実現に向けたSDGsなどの課題について、企業法の視点から取り組んでいく。正解が用意されているわけではない。リアルタイムで上場会

では、必ず一人一回以上は質問するという取り決めである。質問力は、一朝一夕では身に付かない。その場の議論の流れに応じて臨機応変に、最も適した質問ができるようになるには修練が欠かせない。この能力は座学では獲得できないものであり、ゼミの場で何度も質問を繰り返すことが一番の近道なのである。

ゼミナール紹介

持続可能な企業社会の実現に向けた企業法からのアプローチ

研究紹介

柿崎ゼミでは、「持続可能な企業社会の実現に向けた企業法からのアプローチ」と題して会社法、金融商品取引法にとどまらず、広く上場会社規制の検討を通じて、現在、グローバルにも気運が高まるSDGsやESG投資等を巡る課題解決に向けた研究活動を中心に

行っている。

ら始まる就職活動に向けて集団面接にも役立つ力を備えさせる。柿崎ゼミではゼミに入るにあたって一つの約束事がある。毎回のゼミ



柿崎 環
KAKIZAKI Tamaki
法学部教授
専門: 商法、金融商品取引法